

うちの
みんな
読んでね

今日のごよび南無阿弥陀仏

まさに知るべし もろもろの衆生は
みなこれ如来の子なり（涅槃経）



- 1月の楽しみ。いのちあり、お餅をいただく南無阿弥陀仏
- 2月の楽しみ。お釈迦様の涅槃会、悲しみの中にも南無阿弥陀仏
- 3月の楽しみ。春の彼岸、新たな出発、南無阿弥陀仏
- 4月の楽しみ。花祭り、甘茶をかけて南無阿弥陀仏
- 5月の楽しみ。山里は、田植えとともに南無阿弥陀仏
- 6月の楽しみ。雨に打たれても、まっすぐ前を向いて南無阿弥陀仏
- 7月の楽しみ。暑き日に流れる汗も南無阿弥陀仏
- 8月の楽しみ。帰省ラッシュ、お盆ダンスで南無阿弥陀仏
- 9月の楽しみ。夕焼け空や、いのちの故郷、南無阿弥陀仏
- 10月の楽しみ。柿、栗、ぶどう、秋の味覚に南無阿弥陀仏
- 11月の楽しみ。報恩講、親鸞様ありがとう、南無阿弥陀仏
- 12月の楽しみ。成道会、山には雪が南無阿弥陀仏



「おはよう」「今日もありがとう」「ごめんなさい」「大好き」

いのちをつなぐ日々の言葉、南無阿弥陀仏。心が動きにくい朝も、身体が思い通りにならない日も、弥陀は私の言葉となりきって、私を支え、導いている。

南無阿弥陀仏は深い闇を破り、今日を照らす恵みの太陽。孤独の不安によりそう、優しい月の愛情である。（「仏教家庭学校 / 岡本法治師」から）

比叡山・天台宗を開いた最澄（767-822）の著書『山家学生式』の一節。金銀など財力より、自分の置かれた場所や立場で最善を尽くし、思いやりを届けようと説くこの言葉を、故・中村哲医師は好んで使われた。「世界中を救うことはできない、身の回りからだ。1つの事をじっと追いかけて真実を見極める」氏はクリスチャンだが、信頼と人情をもって困難な事業に取り組む姿は、慈善事業や大仏建立の行基（668-749）同様、まさに仏の「慈悲と智慧」を体現したかのようだ。

一隅を照らす
これ則ち国宝なり
（伝教大師・最澄）



本当のものが

わからないと

本当でないものを

本当にする

◆真宗大谷派の、近代の求道的思想家の系譜に出会った安田師は、大谷大学に奉職のち私塾「相応学舎」にて学生を指導されました。安田師は、四国から毎年上洛される方に「我々の悩みとは」と信仰の問題を尋ねられた時に、次のように答えています。

「法は完全であるが、信心という問題になると割り切れるものではない。本願を疑うというのとはどういふことかといえば、自分を放さない。我です。我を頼る。本願を疑う疑いの元は、仏の知恵というものが無いためにはつきりしない。そのために自分を頼る。本当のことがわからないと、本当でないものを本当にする、自分を捨てない。自分を本当にする。その我執というものは根が深い。その根が深いといつても、根が深いということも信仰によって教えられていく。」(「信仰ついでの対話」I)

親鸞聖人の名著「顕浄土真実教行証文類」(教行信証)六巻は、教巻から真仏土巻の五巻までは、はじめに「顕浄土真実」という語が入っており、真実ではない最後の方便化身土巻は不要にもみえます。しかし、白色がそれだけではクリアでない時、「灰色や黒と比べることによって白は更にはつきりします。「真実」も「方便」があることで明確になるのです。

「真実」を見失い我執に生きていることすら気づかないのが私です。逆にいえば「本当のもの」が知らされれば「本当でない自分」が知らされます。そのときに如来の智慧に照らされているのです。(引用「月々の言葉」)

教えて、お坊さん
①

年とともに身体もアタマもおとろえが来てるんです..。

人の身体の水分は、赤ちゃんの時は9割、成人で約7割、高齢者となれば5-6割に減っていき、(余分な延命治療がなければ)最期は枯れ木のようになって命を閉じる。瑞々しさというのは、肌や柔軟性にも現れ、心理面や感受性にも通じる。その減退や停滞を老いとすれば、50歳頃から実感されてくるのではないか。もっとも個人差も甚だしく、例えば陸前高田市のIさん88歳、河和田のMさん90歳(いずれも女性)は、足腰の衰えや不具合はあるが、受け答えも気遣いも現役世代と遜色ない。

四苦の中に「老」「病」が入っているように、仏教も当初からこれをテーマにした。その解決が現代でも困難なのは「もういいトシやから」という医者言葉でも明らか。食事や医療もはるかに手薄だった古代インド・中国では、ヨガや瞑想、呼吸法などの技法が養生の基本だったという。要は身体との付き合い方、気持ちや感情のコントロール術だ。

飽食や便利快適以前の生活では、もっと身体を動かし自然も容赦なかった。寿命が伸びた分、心身の安定を保つ工夫がより必要になった。まずは、恵まれた命を濫ませず感謝することが肝要。言葉を汚さず、部屋を掃除して、身体に感謝して眠る、という秘訣を聞いた。身体も心も少しの負荷(と適切な休み)が鍛錬になるそう。そして、いずれ誰かの世話になるとしたら、良い関係が得られるよう普段から自分の性根を省みなくては、ネ..。

追悼 中村哲医師とアフガニスタンについて

◆報道で知られるように、中村先生はアフガニスタン東部で昨年12月4日、移動中の車に銃撃を受けて亡くなった(73歳)。日本人として最も世界に誇れる人と勝手に思っていた。長年片腕だった運転手や護衛の方5人も、それぞれ何人もの子供を残して即死。まことに痛ましくも衝撃的な事態に激しく心乱れた。

2000年、山と草原の国を大早魃が襲うなか、911テロで米国ら有志連合が同国タリバン政権を空爆し、にわかに注目を集めた。日本でも支援運動が起こり、2002年に当時さばえNPOセンターで仲間とともに衣料品を募って送る活動を行った。

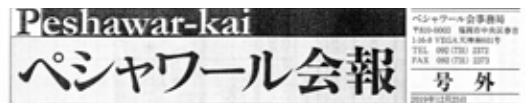
10年後に首謀者が米軍に殺害されて以後、イスラム過激派組織が中東で台頭し、欧州やアジアに拡散。結局米国はアフガニスタンでも傀儡政権を樹立したものの治安悪化、昨年には米軍の実績を有利に隠蔽した文書が暴露された。国連は過去10年間に10万人以上の民間人が内戦の犠牲になったと報告している。

中村先生は2008年8月下旬に市民団体の招きでユーアイ福井で講演され聴きに行った。その数日後、伊藤和也さん(31歳)という現地スタッフの一人が武装勢力に誘拐され、殺害されるという衝撃的な事件が起きる。これ以後、中村先生は日本人スタッフを帰国させ、常駐はほぼ一人で活動を指揮継続された。

36年に渡って現地の辺境に分け入り、医療より先に安全な水を求めて1600本の井戸を掘り、出身地福岡県有志の技術支援で砂漠地帯に27キロに及ぶ用水路を作り、100万本の植樹で60万人分の食料を生産できる灌漑地を10年かけて造成(この事業は、青函トンネルや明石海峡大橋などの受賞歴のある、土木学会技術賞をH29年に受賞)。イスラムのモスクや神学校のほか、国連機関とともに技術者養成所も建設、アフガン政府の支援でこの灌漑モデルを全土に20年かけて広げるプランがスタートしつつあった。

土木作業も重機も自ら先頭に立ち、相手の宗教文化に敬意を払い、裏切られても構わず待つ。欧米の支援団体とは一線を画す活動ぶりとのその成果は、地元民から信頼と尊敬が揺るぎないことを示している。2018年には大統領から名誉勲章、昨年秋には名誉市民権が授与された。

棺がアフガンの空港を出る際には、大統領自らその棺を担いで最大の礼節を表し、到着時に



は日本在住のアフガン人らが「守れなくて申し訳ありません」と何十人も集まり、1300人が参列した葬儀には生前親交のあった上皇陛下からも弔意。アフガニスタン国内外でも「真の英雄を失った」と追悼集会が各地で開かれ、同国の航空会社は尾翼に、芸術家らは保健省の壁に中村先生の大きな肖像画を描き、東部の州都の交差点には中村医師の名前をつけ看板を設置された。



現地から帰国に同行した外務省職員が「これまでに多くの方と接してきましたが、これほど現地の人から愛され感謝される日本人は初めてでした」と語ったという。



これだけ地元で根ざした活動で、多くの村や人々の生活を再建してきた方が、なぜこんな暴力で無慈悲に命を落とさなければならなかったのか、死の縁無量とは聞かされているがあまりにも理不尽すぎる。

水利権の問題とか、外国人排斥の見せしめだとか、農業より麻薬の利益だとかいろんな正義が犯行グループにはあるだろう。しかしその凶弾に、あれほどの事業をなしえた地元民からの信頼に勝る価値があるのか、どうしても納得できないのは私たちが島国「日本」にいるからだろうか。

現地での組織・PMS代表中村先生の活動は、今回取材記事で多く知られることになった。人道支援の在り方、紛争とテロと宗教、進行する気候変動と災害、治水と土木政策、本当の豊かさ、そして利他的精神など、先進国にいる私たちが学ぶ点はさまざま多い。合掌。

■（長男・中村健氏の葬儀挨拶から）「父の、自分のことよりも人を思う性格・どんなときも本質をみるという考えから出ていた言葉だったと思います。その言葉どおり背中で見せてくれていました。私自身が父から学んだことは、家族はもちろん人の思いを大切にすること、物事において本当に必要なことを見極めること、そして必要なことは一生懸命行うということです。私が20歳になる前はいつも怒られていました。「口だけじゃなくて行動に示せ」と言われていました。「俺は行動しか信じない」と言っていました。」

■（朝日新聞インタビュー）「道路も通信網も、学校も女性の権利拡大も、大切な支援でしょう。でもその前に、まずは食うことです。彼らの唯一にして最大の望みは『故郷で家族と毎日3度のメシを食べる』です。国民の8割が農民です。農業が復活すれば外国軍や武装勢力に兵士として雇われる必要もなく、平和が戻る。『衣食足りて礼節を知る』です」

■（「アフガニスタンで考える」岩波書店）「アフガニスタンで事業をおこなうことによって、少なくとも私は世界中を席卷している迷信から自由でいられるのです。一つには、お金さえあれば、幸せになれる、経済さえ豊かであれば幸せになれる、というものです」「もう一つは、武力があれば、軍事力があれば自分の身を守れるという迷信です。武力が安全をもたらすものかどうか、丸腰でおこなう水路建設での私たちの経験が教えてくれます。このような実体験によって、私たちは幸いにも、この強力な迷信から自由です」

◆メディアでお坊さんを目にすることが増えた。お坊さんの社会進出ともいえる近年の現象は若手に顕著であり、背景には2012年の「未来の住職塾」（松本紹圭塾長）の誕生がある。経営の視点を取り入れつつ、寺の在り方や地域社会との関わりを議論してきた受講生は600人を超える。

宗派を超えたネットワークを構築してきた住職塾はこの秋、「未来の住職塾NEXT」を開講。初回は東京で開かれた。

会場は、インドで経営学修士（MBA）を取得した松本さんが僧侶として所属する浄土真宗本願寺派の神谷町光明寺。境内の一部を開放した「神谷町オープンテラス」は、松本さんが仕掛け人。都心のビル街の癒やし空間として完全に定着している。

本堂へ入ると全国から集まった十数人の受講生が。僧侶だけではなく神道関係者もいる。講師は商社勤務の経験があり、経営コンサルタントも務める木村共宏さん。

第1回のテーマは「方向性を定める」で、講義ではカタカナのビジネス用語が飛び交う。受講生によるグループディスカッションのお題は「ミッション」。この場合は「使命」と訳すのが妥当か。



寺の永続性と固有性とは何かを考える場だ。

討議の中身を付箋紙に書き、次々と模造紙に貼っていく。「仏法に基づく実践が行われる」のが寺の使命だと受講生が語ると、講師の木村さんは「今の一般の人にとって、仏法って必要なものでしょうか？」

投げかけられる問いは根源的であり、意表を突く。ただ、専門用語や前提をいったん傍らに置くことで、心に不安や迷いを持つ人々といかに向き合うのかを巡るやりと

りへと発展していく。

顧客が望むものをつくる「マーケットイン」、つくり手がいいと思ったものを売る「プロダクトアウト」。商品開発に関するビジネス用語を用いた議論も始まった。仏教界の慣習や思考からあえて切り離す試みは、地域や檀家（だんか）と寺の関係を異なる視点から明確化する。受講生による熱心な議論は夕方まで続いた。

核家族化の進行で「家」意識が希薄になり檀家制度が揺らぐ。通夜や葬儀を行わず火葬だけで別れを済ませる直葬が広がり、墓の不要論も飛び出す。地方は過疎化にも直面。寺の維持は厳しさを増している。

次代を担う若手住職、後継者の危機感は強い。「未来の住職塾」では寺院の将来を見据えた計画が練られ、これまでにない横断的なつながりが新しい活動も創出してきた。

もちろん、目が覚めるようなアイデアは簡単に出ない。ただ、受講生たちの使命や将来像を巡る議論を聞くのは、ライブ感に満ちた探求の場を実感した。

◆不思議なご縁で昨年より「未来の住職塾NEXT」の講師を務めております。自分のビジネスとコンサル

ティングの経験を生かし、全国の僧侶の方に幾ばくかでもお役に立てるならとお引き受けしました。多くの寺院は厳しい状況に置かれています。一方、次世代を担う僧侶の集まりからは、意欲的な取り組みも聞かれます。共に学ぶ塾生のネットワークは将来の仏教界への大きな布石となるでしょう。私自身も良い学びの場を頂き大変ありがたく思うと同時に、益々精進し、任を全うしたいと思っております。（木村権空）

この頃、お葬儀に関して、喪主さんなどとの話で感じるがあります。
 一つはこれまでお寺との付き合いや葬儀に関わったことがあまりなく、親族や地縁の方からのサポートも薄くなってきたのではということ。若い世代にとって手順やお布施のこと、モノの名前など初めて知ることも多いのは常ですが、ややもすれば業者やネット情報で完結しそうな様子も見受けられます。

あるいは、家族が病気や認知症となってあまり長くないかもとか、単身でそろそろ終活を進めなければ、という状況をお聞きして具体的なお相談を受けたりすることもありました。いずれの場合も、変化しつつある葬送儀礼（お墓や仏壇も含め）に関して、お一人もしくは急遽対応しなくてはなりません。立ち話程度でも事前に少しお話を聞きしていれば、我々もそれなりの対応が取れるもの。勿論、ご家庭によってご事情やお考えは実に様々です。

しかも時期はかまわず突然のご往生もありえるのが私たちです。

そこで、ご本人にとっても、あるいは見送る立場の方にとっても、ぼちぼち「葬送」のことを考えたり見聞きしておくことがやはり大事です。できたら仏事法要などお参りして（ご自宅の月忌やお寺の報恩講など）お寺さんと話したり、ご家庭内で意見交換してみることが望ましいです。

といっても完璧な準備は難しいし、家族間であまり押し付けになったりするのもよくありません。例えば一口に家族葬と言っても形態は多様で長所短所あります。さまざまな手続きの中、葬送儀礼はごく一部ですが、後の方がお見送りをし、継いでいく仕事をしっかり経験する機会は必要です。丈夫なうちに仏教・宗教に触れてみて、ご自分なりの死生観、信仰を考えてみませんか？

終活（生活？）全般、お気軽にお声かけいただき、いつでもご相談ください。

住職：林 暁 携帯 090-9765-1343

本年も宜しく
 お願い申し上げます。

▼前住職は昨春の人工股関節を入れてから思うように筋力は快復せず、やっと杖で歩くようにな状態。今年二月で九〇歳です。

お参りで頂いたお茶菓子などを、子ども食堂や学習塾、近くの児童養護施設におすそ分けしています。ども喜ばれ、皆様にも感謝申し上げます（S）

▼去る十一月に池田町のイベント「森フェス」にて、「木ノ実のおやき」と「どんぐりクッキー」を手作り販売しました。初めての出店でしたが、無事完売！準備はいささか大変でしたが、とても楽しかったです。いろんなイベント

に出店したいと思
 いますので、機
 会があれば、
 ぜひご賞
 味ください
 い。（C）



今年度
 行事予定

- ・お年頭：1月2日（木）終日
- ・永代経：3月20日（祝金）昼3時
- ・七日盆：8月7日（金）終日
- ・本盆：8月15日（土）終日
- ・報恩講：9月22日（祝火）昼3時、夜7時